Osaka University Knowledge Archive

Title	昭和初期の日本木材業 : 競争的環境と費用計算の精緻化
Author(s)	松村, 隆
Citation	大阪大学経済学. 2013, 63(1), p. 95-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57025
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

昭和初期の日本木材業

― 競争的環境と費用計算の精緻化

松　村　　隆[†]

はじめに

本稿では，昭和初期の日本木材業の動向について検討する。

すでに前稿で指摘したように，日本の木材業は日露戦争期を境として，大きな変化を経験した。木材調達方法の多様化を背景に，国内，海外の諸産地から，木材調達が可能となった[1]。東京市場を強く意識した能代木材業のような新産地もあらわれた[2]。需要面でも，多様な木材の用途が開かれていった，さらに，輸出，移出も増大傾向にあった[3]。

本稿は，このような動向の展開をみることを目的とする。前時代との目立った差異は，米材輸入が本格化していることである。

本稿で用いる史料は，商工省商務局編纂『商取引組織及系統ニ関スル調査（木材）』（1930）が中心である。

1. 日露戦後木材業の変化と昭和初期

昭和２（1927）年における日本の森林伐採面積は，植民地を除くと34万町，伐採総価額１億9800万円である。内用材は１億1600万円であり，約59％をしめた。薪炭材は7800万円であり，約38％をしめた[4]。

まず木材産地の多様化についてみたい。大正10（1921）年から昭和２年の日本内地総生産量をみたものが，表１である。これを主要出材県別にみたものが，表２である（ただし，木材は，河川その他搬出路の関係上，他府県を経由して出材することがある。この場合，他府県を経由して出材したものは控除，他府県産であるが当該府県を経由して出材したものはこれを合算して計算している[5]。）

輸移入については，輸入木材は普通建築用材であるパイン，ファー，シーダーが大部分をしめた。ドロノキ，ハコヤナギ，チーク等がこれに次いだ。仕出地としては，北米合衆国が，917万7000石，7088万3000円が最大であり，ロシア領アジアが，167万2000石，1255万5000円，カナダが，166万1000石，1213万

表１　内地材総生産量（単位：石）

大正10年	28,914,493
11	31,396,750
12	33,547,137
13	30,690,681
14	28,041,832
大正15（昭和元）年	25,523,986
昭和２年	24,294,447

出典：『商取引組織及系統ニ関スル調査（木材）』（以下『調査』と略記）pp5-6。

---

† 大阪学院大学准教授

1 拙稿「日本の工業化と木材」2000年，『大阪学院大学通信』第31巻第３号。

2 拙稿「能代の木材業と木材輸送－鉄道開通の意義について－」2010年，『大阪学院大学　国際学論集』第21巻第２号。

3 前掲「日本の工業化と木材」。

4 この段落については，『商取引組織及系統ニ関スル調査（木材）』（以下『調査』と略記）p.1。

5 『調査』p.5。

表２　主要県出材量（単位：石）

県名	長野	秋田	和歌山	熊本	静岡	青森	鹿児島	三重	広島	宮崎	山口	高知	奈良
大正 10 年	913,603	1,631,116	952,884	1,277,543	1,674,831	1,171,043	901,373	720,309	1,679,110	1,544,272	1,243,742	279,846	1,430,732
11	1,090,626	1,618,750	1,068,626	1,774,336	1,247,432	1,791,655	1,496,131	869,824	632,429	1,729,006	992,905	1,888,349	2,940,365
12	1,407,820	1,448,725	1,067,640	1,472,118	1,344,616	1,385,878	1,517,740	1,532,560	614,002	1,881,704	1,471,617	1,855,014	3,475,251
13	1,317,806	1,233,377	1,118,641	1,829,421	1,264,170	1,016,526	1,157,770	1,125,779	744,341	1,078,988	1,374,000	1,612,518	2,977,275
14	1,417,379	1,343,769	870,512	1,436,428	1,252,379	941,588	774,782	975,559	984,508	904,594	1,268,885	1,313,959	2,002,713
大正15(昭和元)年	1,531,757	1,123,426	908,773	1,548,555	1,164,030	656,642	739,646	982,966	628,667	1,160,520	754,515	1,000,824	851,842
昭和２年	1,721,655	1,327,670	1,190,992	1,099,937	1,099,394	1,063,184	1,041,892	1,009,639	1,005,250	771,410	692,369	664,819	529,616

出典：『調査』p6。

2000 円であった[6]。

移入材（北海道材の樹種は内地材と全く異なるため，便宜上北海道材を移入材に含む）については，北海道材，樺太材，台湾材，朝鮮材は気候風土の関係上，内地材と樹種が大きく異なり，以前は移入量は僅少であった。しかし近年は増加[7]，その様子を見たものが表3である。また昭和２年におけるこれら木材の移入府県についてみたものが，表４である。

以上のように，国内において，鉄道の発達や，海外輸送の展開をうけて，木材産地が多様化していったばかりでなく，植民地を含む海外についても，日本にとっての主要産地として成長してきた様がみてとれよう。

次に，木材の用途について[8]は，用材についていうと，第１に家屋建築用材であった。構造用材としては，スギ・ヒノキ・ヒバ・サハラ・アカマツ・クロマツ・落葉松・エゾマツ・姫小松・樅・唐檜・ツガ・マキ・ケヤキ・シホチ・樫等がもちいられた。装飾，家具他用材としては，神代杉・黒部杉・朴・楓・キリ・黒柿・サクラ・槐・桑・樫・紫檀・黒檀・栴檀・マホガニー等がもちいられた。

建築以外の用途は，多岐にわたった。主要なものとしては，土木用，橋梁用，船舶用，車両用，鉄道枕木，電柱，諸機械用等であった。また家具，下駄，漆器木地，運動用具，武具，文具，玩具の原料としてもちいられた。製紙原料，樽桶類用，包装箱，燐寸軸木にも利用された。

以上のように，日露戦後にみられた木材用途の多様化傾向は，昭和初期にもひきつづいて進展していた。薪炭材の割合が減少し，用材の割合が増加していたことが確認される。

表３　主要移入材の推移（単位：石）

	北海道	樺太	台湾	朝鮮
大正 10 年	3,323,530	1,104,455	54,898	111,389
11	2,639,921	2,496,749	99,146	219,285
12	2,978,754	6,365,088	59,997	269,672
13	3,000,872	6,730,524	88,575	297,489
14	3,064,247	8,602,736	72,047	76,312
大正15(昭和元)年	2,348,625	11,337,341	88,889	220,722
昭和２年	2,041,524	11,990,918	89,718	61,478

出典：『調査』p11。

表４　移入材主要受入府県（昭和２年，単位：石）

愛知	2,589,000
大阪	2,121,000
東京	1,869,000
静岡	1,802,000
和歌山	932,000
神奈川	836,000
新潟	610,000
広島	471,000
富山	410,000
熊本	353,000
兵庫	337,000

出典：『調査』pp10-11。

6　輸入木材と仕出地については，『調査』pp.8 － 9。
7　移入材については，『調査』p.10。
8　『調査』pp.3 － 4。

表５　木材輸出の推移（単位：千円）

大正４年	6,881
9	29,126
10	15,325
11	14,160
12	12,275
13	13,674
14	19,765
大正 15（昭和元）年	17,977
昭和２年	15,897

出典：『調査』p7。

最後に，輸移出の状況を確認したい。当時の輸出状況について，その総額をみたものが表５である。輸出木材は，鉄道枕木，箱板及樽板，マッチ軸木，マッチ箱用経木他であり，建築用材は輸出されていない。仕向地は，鉄道枕木は中国及関東州，箱板及樽板はイギリス領インド，海峡植民地，オランダ領インド，マッチ軸木は中国及香港，マッチ箱用経木は中国及香港他が主となっていた。輸出高では鉄道枕木が第１位であり，金額でみると箱板及樽板が第１位であった[9]。

移出について[10]は，台湾，朝鮮，北海道が主であった。台湾は，阿里山，八仙山等の大森林を有していたが，当時は伐採量は少なく，内地から建築材の供給をあおぎつつあった。その主たる材は，スギ，マツであった。数年来の状況についてみたものが，表６である。朝鮮への移出は，主として鉄道枕木であり，板，角材他の建築用材がこれに次いだ。数年来の状況をみたものが，表７である。北海道への移出は，挽材，丸太材が多く，樹種はスギが最も多かったが，数年来の状況は表８のようであった。

以上のように，輸移出についても，順調な進展がみられた。価額でみても，昭和２年総伐採額１億 9800 万円からみて，少なくないと考えられる。

表６　台湾への木材移出（単位：千円）

大正 11 年	2,895
12	1,841
13	1,370
14	2,676
大正 15（昭和元）年	4,066
昭和２年	4,852

出典：『調査』p9。

表７　朝鮮への木材移出（単位：千円）

大正 12 年	1,925
13	2,876
14	2,268
大正 15（昭和元）年	3,344
昭和２年	3,868

出典：『調査』p9。

表８　北海道への木材移出（単位：千円）

大正 11 年	570
12	1,750
13	1,243
14	1,792
大正 15（昭和元）年	2,519
昭和２年	1,511

出典：『調査』pp9-10。

2. 木材価格と費用

木材産地が海外をも含めて多様化，木材用途も多様な新市場がひらかれていくなか，昭和２年当時，木材の費用構成はどのようなものであっただろうか。ここでは，天龍材，新宮材についてみたい。

木材は製材にあたり，１本の原木から同一等級の品を得ることはできない。また使用原木の大小，形状により，歩留りに大きな差異が存する。伐採する山の深浅，搬出の難易等により立木代金，山出賃，川狩賃，筏川下賃等といった運搬諸掛に大差が生じる。このため，的確な生

[9] 輸出材と仕向地については，『調査』p.7。
[10] 『調査』pp.8 − 10。

産費，採算を示すことは困難である[11]。

いま1例として，天龍材をみよう[12]。中ノ町からおよそ10里の上流で伐採するものとして，その尺〆当りの採算をみれば，次のようである。

中ノ町到着までの費用として，立木代3円，伐採費及造材費35銭（ここには皮剥費，玉切り，極印，検地が含まれる。），運搬費1円80銭（ここには山出・川狩・筏川下賃が含まれる。），組合費・部費・雑費20銭，合計5円35銭であった。

仮に4寸及3寸丸太をもって中貫を製材するとすれば，尺〆当り，製材費85銭7厘，荷造費13銭6厘（ここには縄，墨代，人夫賃が含まれる。），合計99銭3厘である。製材にさいして発生する鋸屑，屑板は，燃料として約50銭で販売でき，これを差引くと，製材・荷造に要する費用は，49銭3厘である。

製材を東京の問屋に販売する場合，深川までの運賃諸掛は次の通りであり，産地の負担であった。すなわち，製材工場より汽車積込場費の小運送費9銭5厘，天龍川駅における諸掛18銭5厘（ここには貨車引込線使用料，置場料，積込料が含まれる。），天龍川駅より汐留駅まで鉄道運賃64銭3厘，汐留駅における荷おろし料及深川までの小運送費27銭8厘，合計1円20銭1厘である。

以上みたように，立木代と中ノ町到着までに要する費用が5円35銭，製材及荷造費49銭3厘，天龍工場から深川までの運賃諸掛1円20銭1厘，合計7円4銭4厘が原価である。

原木から製材できる等級別生産割合は一般的な割合であるとして，当時の東京市場の相場によると，尺〆当り平均売価は8円90銭である。東京問屋は買値の1割を口銭として差引く習慣であったから，産地商人の実際手取金は8円3銭7厘である。原価7円4銭4厘を差引くと，利益は99銭3厘となる。むろん，製材後上等品が多く生産できた場合は，利益はこれ以上となり，逆は逆であった。

東京問屋と仲買，仲買と需要者の間の取引は，相対取引であり，相場は一定しなかった。一部の品は無利益でも，時に販売された。10割の利益がある場合もあり，製品によって比較的薄利のもの，多額の利益であるものがあったが，相場の変動は激しく，仕入値段は様々とならざるを得なかった。利益の決定はこのように困難であるが，平均的に考えると，問屋が約1割であり，仲買は約2割とみて大過ない。

したがって，東京問屋の平均仕入値は上述の通り8円3銭7厘，問屋の利益が約1割として80銭4厘，深川・神田間を馬車積とすると運賃35銭，ここまで合計して仲買の仕入値は9円19銭1厘，仲買の利益を約2割とみると1円83銭8厘，仲買の売値はしたがって11円2銭9厘である。なお仲買と需要者との間の運搬費は，通常需要者の負担であった。

次に新宮材の価格構成を検討しよう[13]。熊野川上流12,3里の地点から新宮市場までの杉材，尺〆当り運搬費用を計算すると，十津川流域の場合，伐採及製材賃43銭，山出賃1円35銭，管流賃49銭5厘，筏組用材料代19銭5厘，組筏乗下賃39銭，産出地特別税19銭5厘，産出地組合費5銭5厘，新宮組合費1銭1厘，保管料8厘，川下諸税金12銭7厘，合計で3円25銭6厘となる。北山川流域の場合，伐採及製材賃39銭，山出賃1円35銭，筏組用材料代36銭，組筏乗下賃70銭，産出地特別税29銭5厘，産出地組合費5銭2厘，新宮組合費1銭1厘，保管料8厘，川下諸税金11銭7厘，合計で3円28銭3厘となる。このように，杉材1尺〆につき出材費はおよそ3円2,30銭を必要とした。

[11] この段落については，『調査』p.42。
[12] 『調査』pp.42 − 45。
[13] 『調査』pp.45 − 49。

出材費用は山の深浅により大きな差異があった。すなわち，出材が容易な場合は1円20銭，困難な場合は4円以上とかなりの費用の違いであった。荷主は経験によりこの運搬費用を事前に推算，新宮市場で価格が受け入れられるように立木の値段をつけた。このため立木の価格は一様ではなく，山が深くなるに従い安くなった。新宮より川上12,3里では，立木は3円前後であった。

新宮市場での価格を考慮すると，尺〆当り利益は約50銭であった。利益は，伐採後1山から出材できる量や，費用の多寡にも左右された。このため荷主の商売は，非常に不安定であった。問屋は，新宮市場で尺〆当り6円80銭で調達した木材を，3,40銭の利益をとり7円10,20銭で売りさばいた。丸太類は太いものは高値であった。販売商は問屋より，たとえば杉丸太を7円10,20銭で購入，これを賃挽させて4分板をとるものとする。正6寸幅の48尺の板は，80枚・4束得られる。製板賃は1円20銭程度であり，4分板正6寸幅の相場は1等品では8円40銭である。利益は，屑板・鋸屑の代価が主となるが，4,50銭であった。

板類は，1等品，上小節，小節等があった。これらの割合の予知は困難であり，販売業者の損益は不安定であった。販売業者が大阪市場に出品する場合，相場の上向基調のとき利益は多く，逆のとき損失となった。たとえば，新宮での買入価格7円20銭，挽材加工賃1円20銭（ここまで上述の通り），乾燥並結束賃30銭，勝浦まで汽車運賃22銭，勝浦からの運送費48銭，組合移出料1銭，大阪問屋口銭72銭，費用合計10円13銭であり，大阪市場価格9円60銭，背板売価核9銭とすると，差引44銭の損失となる。

仲買商は市場より2％の歩戻があったが，買取った木材を自宅に引取る費用にその程度要した。小売値は尺〆11円程度であり，仲買の利益は14，5％であった。

3. 安価材の要求

昭和2年当時において，以下にみるような安価材の要求は，それ以前と比べた場合大きな特徴であった。これは，日本国内及海外の多様な産地から木材が調達されるようになったことと深く関係するものと思われる。本章では，安価材要求の実態，またその効果について検討したい。

「建築費用中木材の代価は約3分の1と云わる。建築材として適当なる木材は建築物の種類，目的，家屋の部分的用途，個人の趣味並に地方の習慣等に依り一定背ざれ度も，一般に繊維の直通し，強度並に保存力強きこと，工作に困難ならざること，外観の良きこと，価格比較的廉なること等の要件を必要とす。」[14] とされ，価格は唯一の条件ではないとしながらも，次のように述べる。

「材種別の出材状況を見るに丸太材，杣角材の如き大材と板類の如き其の原木が比較的大材を要すべき材種は大正10年以来漸減の趨勢にして昭和2年に於て唯丸太材のみ増加せり。細丸太類は之に反し年々増加しつつあり，其の原因は内地大材の生産の減少と一方の外国産木材の輸入に依り内地産大材出の採算困難となれるに由るものと見るべく，又細丸太の漸増せるは各地人工植栽林が漸く利用期に入り且大建築足場丸太の需要激増したると外材との競争殆ど皆無なること等に依るなり[15]。」

国内材生産の減少は，外国産材との競争関係が重要であったこと，国内産材は苦戦していることがみてとれる。さらに具体的に，次の指摘がある。

「近年建築界に於ける安価材の要求は，パイン，ファー及シーダーの輸入を頓に増加せしめ，大正4年には僅に8万5000石，60万6000

[14] 『調査』p.3。
[15] 『調査』p.4。

円に過ぎざりしもの，大正9年には87万4000石，1591万円に達し，又大正11年に於ては827万5000石，7452万7000円に到り爾来年々増加の趨勢にあり。大正12年以後のパイン，ファー及シーダーの輸入額を表示すれば左の如し[16]。」として，表9を示している。

こうした安価材の要求は，北海道材，樺太材，台湾材，朝鮮材にもむけられていた。

「北海道材，樺太材，台湾材及朝鮮材は気候風土の関係上内地材と樹種を大に異にするを以て従前は其の輸入量僅少なりしも近年建築界に於ける安価材の要求，製函事業の発達，混疑土建築の勃興に伴う型板需要の激増，パルプ製造事業の発達等は移入の増加を促し，大正10年に於て総移入量459万4000石なりしもの大正13年には1011万7000石に増加し，昭和2年に於て派1418万3000石に達し，大正10年に比する時は3倍以上に当たるに至れり[17]。」

製函事業，型板需要，パルプ製造事業といった分野への材供給を含みながらも，やはり建築材の安価さが要求されていたとみられる。

それでは実際上，安価材はどれ程の効果を示したであろうか。

欧州大戦（第1次世界大戦）を期として次第に米材の輸入がさかんとなったが，大正10年ころの米材使用量はまだ家屋建設材総量の15％程度にすぎず，天井板等に使用されるのみであった。しかし昭和2年においては，総用材の65％に米材を使用，建築上必要不可欠な材となっていた[18]。

米材と内地材との価格の比較は，同形の種類の品が少ないため一概に何割の差異があるといいがたい。しかし，昭和2年12月の東京卸売相場で，米杉，秋田杉の4分板を比較すると，次のようであった。すなわち，無節の4分板の場合1円につき，米材は2枚9分，秋田杉は1枚9分5厘であり，上小節の場合1円につき，米材は3枚1分，秋田杉は2枚5厘であり，上並の場合1円につき，米材は6枚2分，秋田杉派4枚7分であった[19]。

表9　パイン，ファー，シーダーの輸入

大正12年	8,038（千石）	80,525（千円）
13	11,326	119,584
14	7,560	69,727
大正15（昭和元）年	11,640	95,599
昭和2年	12,531	95,720

出典：『調査』p8。

木造家屋の建築では，特別に木材の吟味をしないかぎり，木材代は建築総費用の24，5％から30％であった。内地材のみを用いて築造したときと米材を併用したときの比較をすると，次のようであった。すなわち，大正11年秋，大林組が引受けた中流住宅30坪乃至40坪の建築費坪当り価格を示すと，米材15％を用いた場合，木材費39円20銭，大工費25円，その他115円80銭であり，合計が180円であった。対して内地材のみを用いる場合，木材費43円20銭，大工費25円，その他115円80銭であり，合計が184円であった。内地材のみを用いた場合，建築費は，1坪当り4円高く，30坪の住宅では120円高くなる。また，昭和3年秋，大林組が査定したところによると，坪当りでみて，米材65％を用いた場合，木材費36円80銭，大工費22円，その他121円20銭であり，合計が180円であった。対して米材13％を用いた場合，木材費38円，大工費22円，その他121円20銭であり，合計が181円20銭であった[20]。

以上のような木材価格の差異を，どのように評価すればよいであろうか。大正11年の場合，米材15%を用いたとき内地材だけを用い

[16] 『調査』pp.7 − 8。
[17] 『調査』p.10。
[18] この段落については，『調査』p.49。
[19] この段落については，『調査』p.49。
[20] この段落については，『調査』pp.49 − 50。

た場合に比べ節約できる費用は，約2.2％である。昭和3年では，米材を65%，13％用いる場合の費用の差は，1％以下にすぎない。建築費中その他とされる項目の内訳[21]は，100分率で示すと，基礎工事15，木組工事50，屋根工事5，左官工事0.5，建具工事10，金物工事3，塗工事1，仮設工事後仕舞費15となっている。木材費用の3倍程度の工事費がかかっているとみられる。

こうした事情を考慮すると，当該期における安価材の要求は，相当緻密な経済計算にもとずいてなされていたと考えざるを得ない。第1次世界大戦後から昭和初年にかけての緊迫した経済状況，競争環境を示すものとみられる。

4. 検尺他の不正と市売の問題視

以上みてきたように，海外をもふくめた産地の多様化，輸移出の増大，製品市場の多様化が一層進展した当該期において，木材業界は一層の競争的環境に直面，結果木材のコストが緻密に計算され，意識されるようになった。こうした状況を同じく示すこととして，当該期に取引上の欠陥弊害として，検尺及品等の変更による不当な利益，市売の弊害が指摘されていることを考えたい。以下にみるように，たしかにこれらは取引上の欠陥ではある。しかし古くから，多くの地域でおこなわれてきた慣習であったとも解釈できる。問題は，なぜ当該期にこれらが問題視されるようになったかということであろう。

木材の取引においては，受渡しの際に検尺が実施された。売方・買方両店店主がこれに立会うことは少なく，荷役人夫に委ねられた。また尺・ものさしによる検尺は手数を要したため，実際上は荷役人夫が陳列材，堆積材を見るのみのことが多かった。永年の熟練があったから，検尺違いは2,3%以内にとどまった。問題は，検尺人は自己の得意客に利益となるように故意に間違う場合があることである。買主，売主による買収も多くおこなわれた。遠隔地との取引では，売主による出荷時の検尺と買主による着荷時の検尺に差異が生じることがあった。この場合，双方ともに実際に検尺していないため，買方の利益となるように決せられた[22]。

木材商は，購入木材の品等の引上をおこない利益を得た。たとえば，板類において無節，上小節，小節の3銘柄があると，秋田4分板・巾尺9寸の場合，1枚の価格はそれぞれ50銭，47銭，21銭5厘であった。小節の束から比較的良い材を上小節と混ぜ，また上小節から抜き取った材を無節に混じ，売却することが多かった。このため，荷主，問屋，仲買と手を経るにしたがって，同じ銘柄の材であっても品質が下がっていくのが普通であった[23]。

木材は天然の産物であり，個々相異なる品が多く，銘柄の選定は漠然とした規定により商人が習慣と熟練により定めることが原因である。そして，規格の統一により，ある程度この弊害は除去できるとされる[24]。一応の解決策も提示されているとみられる。

次に，市売の弊害についてみたい[25]。市売には，参加業者に種々の便益があったが，次のような問題点もあった。

第1に，かならずしも公正な価格が形成されないという問題がある。市売の競落価格は，標準時価をしめすが，かならずしも公正な価格ではない。その原因は，思惑がなされやすいこと，需要の焦点にならないことである。むしろ不自然に木材の市価を決定する傾向がある。

第2に，買方が一定であり，大阪市内の仲買商のうち市場の認定した者にかぎり取引に参加

[21] 『調査』pp.50 － 51。

[22] この段落については，『調査』pp.61 － 62。

[23] この段落については，『調査』pp.62 － 63。

[24] この段落についてはここまで，『調査』p.63。

[25] 『調査』pp.63 － 65。

できた。これ以外の市場に参加できない木材商は，非常に多数におよんでいた。

第３に，一度市に出品した木材は，価格によらず売却するしかなかった。このため，売手には大きな不安があった。市場では指値品は入札をおこなうものとする規定はあったが，実際にはおこなわれていなかった。以上のように，買方に利益，売方に不利ということがあった。

手数料については，７分５厘（旧市場は８分）であり，高率とはいえない。しかし荷主にとっては，市場の費用，出品のための運送諸掛等全部売主の負担である上に，仲買人へ２歩の歩戻金を支払わなければならなかった。これは理由のないことであり，売主・荷主の負担は重くなった。さらに当該期２市があり，同様の品が終始市に出されるため，市場の価格は一般市価にくらべて安価の場合が多かった。

なお出品のたえなかった理由は，出品手続が簡易であること，金融の便があることによる。木材の市売を委託すると，支払期日までの日歩を差引かれるとはいえ，着荷と同時に荷主は時価の７掛位の代金を前借できた。

以上みたように，当該期において，それ以前の木材業の慣習にたいして，疑問が出されているといえる。逐一の検尺の費用を節約する意義，また市売に出せば確実に換金できる利点及金融をうけられることといったことよりも，明確さを重視するようになったとみられる。すなわちそれが，規格統一をもとめ，指値を重視する提案として示されている。

結論

これまで確認したように，昭和初期においても，日露戦後にみられた木材産地の多様化とくに植民地をふくむ海外についても主要な木材調達地となったこと，木材用途の多様化傾向，輸移出の順調な進展がみられた。こうした変化をささえた要因として，輸送手段の進歩を重視せざるを得ない。売手，買手ともに取引の選択肢が増加したことで，木材業界は競争が激化した。利益計算の厳密化が一層求められるとともに，以前は取引上の慣習とされてきた簡易な検尺，市売が問題視されるようにさえなったと考えられる。

The Japanese lumbering industry in early stages of Showa Era

Takashi Matsumura

This paper examines the trend of the Japanese lumbering industry in early stages of Showa Era. The tendency to have been seen after the Russo-Japanese War progressed further for this time. Diversification of a wood place of production and diversification of a wood supplier are seen. Import from a foreign country is also included here. Diversification of the use of wood progressed further. Favorable progress of export and shipment was seen . These things were supported by progress of means of transport, such as railroad construction and use of a steamship.

The choice of wood dealings increased. Intense competition took place. Sellers and buyers came to calculate profits correctly. For this reason, the simple inspection of drilling length which was the custom on dealings once, and a consignment sale came to be regarded as questionable.